二〇二二年一二月九日

一年のよかつた探しする柚湯　よう子
また一人着ぶくれの来る更衣室　ひのと
窓口にポインセチアや町役場　素　秀

二〇二二年一二月八日

イマジンも遠くなりけり開戦日　もとこ
宅急便濡れ手で受くる師走かな　なつき
奥琵琶の小さき番屋氷魚炊く　あひる

二〇二二年一二月七日

着膨れて横歩きなるかづら橋　よう子
白息く遺愛の花に語りかけ　うつぎ
まづ雪の深さを記す日誌かな　ひのと
新雪をホップステップして烏　明日香
花舗の土間ポインセチアが席巻す　たか子
乱れ髪一つに束ね冬帽子　きよえ
柊の香に振り返る散歩道　豊　実
ひつじ田の近江平野はうすみどり　せいじ
吊されて疲れ肩なるコートかな　澄　子

二〇二二年一二月六日

夕映にしばし華やぐ枯野かな　はく子
悴む手打ちて干し物手のしする　たか子
少年の細き拳や寒稽古　かえる
炉火を守る若き女将の粉挽き唄　よう子
昇進の夫を労ふ柚子湯かな　なつき
肩ならべ寒の芹摘む母娘かな　あひる

二〇二二年一二月五日

不揃ひは命のあかし寒卵　ひのと
寒風裡間遠過ぎゆく救急車　満　天
人声の真つすぐに来る枯木道　うつぎ
アメ横にダミ声ひびく師走かな　智恵子

二〇二二年一二月四日

遠国の酒取りよせて冬篭　澄　子
人気なき陸軍墓地に黄落す　ぽんこ
このへんに生家ありけり冬木立　みきお
凩に声飛ばされて下校の子　うつぎ
波音の間遠に沖の冬夕焼　きよえ
厨の灯黄身に映りし寒玉子　あひる

二〇二二年一二月三日

尻餅に破顔一笑大根引　みきお
悴めど指が覚えてゐるピアノ　ひのと
柚子湯から柚子ごと嬰を受け取りぬ　ひのと
目を凝らし見れば増えゆく冬の星　あひる

毎日句会みのる選・二〇二二年一二月一一日